

# 「かながわ人づくりコラボ2016」の実施結果の概要

## 1 開催の趣旨

「かながわ教育ビジョン」第6章に基づき、「かながわ人づくりコラボ」を開催する。  
コラボ2016は、今年度新たに設定した「かながわ教育月間」中に開催することで、かながわ教育ビジョン（平成27年一部改定）について県民の方々と共感と共有を図り、様々な主体との協働・連携による人づくりをより一層推進するとともに、実効性のある教育施策に資する。

## 2 開催の状況

- (1) 日時 平成28年11月5日（土）13時から16時45分まで
- (2) 場所 神奈川県立神奈川総合高等学校 多目的ホール
- (3) テーマ かながわの新たな学校づくりと地域づくりを考える  
～コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の推進～
- (4) 参加者 378名

## 3 開催の内容

### (1) 開会（神奈川県教育委員会 教育長 桐谷 次郎）

開会の挨拶として、「かながわ教育月間」を今年度新たに設定し、その教育月間の終盤を飾る、本コラボの開催の趣旨とテーマ設定の視点等について、話があった。

また、「ともに生きる社会かながわ憲章」の取組みについて、話があった。



### (2) 学校づくりと地域づくりの実践紹介～「かながわ教育月間」の取組みを踏まえて～

#### ア 地域における実践紹介

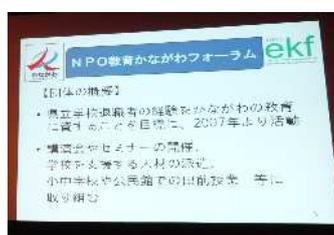
- 神奈川県立生命の星・地球博物館（学芸部長 瀬能 宏）  
博物館の活動を「かながわ教育月間」中に開催した「学芸員一日体験」等も交えて紹介するとともに、博物館のボランティアと学芸員との協働が人づくりの一環につながることやボランティア制度等の課題や展望について、発表を行った。



- かながわ人づくり推進ネットワーク

（神奈川県立神奈川総合高等学校、NPO教育かながわフォーラム、横浜国立大学、横浜薬科大学の取組み）  
（かながわ人づくり推進ネットワーク 幹事 中島 徳頭）

「かながわ教育月間」中に開催された、かながわ人づくり推進ネットワーク参加団体（神奈川県立神奈川総合高等学校、NPO教育かながわフォーラム、横浜国立大学、横浜薬科大学）の教育イベントを中心に、各団体の概要や、教育イベントの概要と結果等について、発表を行った。



## イ 学校における実践紹介

### ○ かながわのコミュニティ・スクールの取組み

(神奈川県教育委員会 教育局長 田代 良一)

県内の小・中学校のコミュニティ・スクール（以下「CS」という。）の指定状況と、実践事例の紹介とともに、CSが増加傾向にあり、今後更に推進していくこと、また、県立高校改革におけるCSの導入とその内容とともに、今後、県立特別支援学校・中等教育学校も含め、全県立学校をCSとして指定する予定であること、さらに、CSを支援する取組みの紹介等を行った。



そして、これまでのかながわらしい取組みや、かながわの様々な資源を生かした、保護者や地域住民等の参画・協働による「かながわらしいコミュニティ・スクール」の推進による、学校づくりと地域づくりを進めるため、これからも、CSの仕組みを生かした、「地域とともにある学校づくり」と、学校を核とした教育コミュニティづくりについて、県民の皆様とともに考え、取組みを進めていく、という話があった。

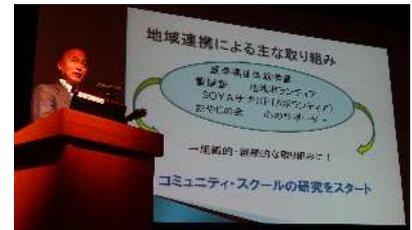
### ○ 神奈川県立岸根高等学校（教諭 本田 均）

今年度からCSに指定され、指定前の地域連携の取組みとともに、校内プロジェクト・チームや学校運営協議会及び部会の設置や活動など、指定後の状況等について、発表を行った。



### ○ 神奈川県立秦野曾屋高等学校（総括教諭 黒木 太）

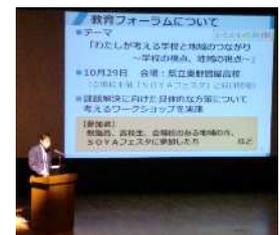
昨年度から進めているCSに関する実践研究を、これまでの取組みの分析とともに、学校としての協議会や部会の設置、「かながわ教育月間」中に新たに開催した「SOYAフェスタ2016」の取組み等について、発表を行った。



### ○ 教育フォーラムの取組み

(神奈川県教育委員会教育局総務室 企画調整担当課長 柏木 真吾)

10月29日（土）に「わたしが考える学校と地域のつながり～学校の視点、地域の視点～」をテーマに「教育フォーラム」を開催し、グループに分かれて課題解決に向けた具体的な方策について話し合ったワークショップの様子や主な意見等について、発表を行った。



## (3) 教育論議

### ア 基調提案「地域とともにある学校づくり」

(文部科学省参与／政策研究大学院大学客員教授 貝ノ瀬 滋)

地域とともにある学校づくりに関わり、中身のある実践発表と、神奈川県としても県立高校をすべてCSに指定するという力強いお話があった。大変頼もしく、また敬意を表したいと思う。これを機会に、県民の皆様方に参加、参画していただきたいと思う。また、市町村にも、CSの普及・拡大に頑張ってくださいことを期待したい。

学校、家庭、地域の連携はなぜ必要なのか。1日は24時間であり、子どもたちが学校にいる時間は3分の1の約8時間で、残り3分の2の約16時間は、地域や家庭で過ごすことになる。例えば、挨拶をしっかりとできる子どもたちに育てたいと、先生と子どもたちが取り

組んだとする。しっかり挨拶ができるようになったところで、家庭で親との挨拶がなかったら、地域の人たちとの挨拶がなかったら、子どもたちは恐らく挨拶をしなくなるのではないかと思う。つまり、学校生活の中で、先生と子どもたちが取り組んだとしても、残りの3分の2の生活の中で、それが担保されなければ、定着しない。挨拶を例えに言ったが、これは、すべての教育活動に言えるのではないかと思う。学校で目的とするものと、家庭の教育で目的とするものと、地域社会の目的とするものとは、同じベクトルを向いていないと、子どもはうまく育たないと思う。三者が、実際に同じ方向性をもって、取り組んでいけるかが重要である。先生方だけではなく、家庭での役割や構え、地域社会の方々の力添えが、地域の子どもたちをよりよくしていくことに欠かせない。



一緒にやれば力になるが、それがなかなかできていない。実効性あるものにするためには、一定の仕組みが必要である。その有力なツールの1つとして、CSが考えられる。私も、県も、ここにいる関係者もやはりCSがベストだと思っていると思う。CSは法律に位置付いた仕組みなので、安心して、自信をもって、進めていただきたいと思う。

ただ一部に、その中味が十分理解されていない。特に、学校運営協議会の役割の1つである、教職員の人事について意見を出せることについて、一部の誤解がある。個別具体的な人について、教育委員会に意見を出すというように誤解されてしまうことがある。例えば、サッカー部の先生が異動でいなくなり、サッカーに堪能な先生に来ていただかないと、子どもたちが悲しんでしまうなど、一般的な人事については要望が出せるということである。それを誤解のないようにしていく必要があると思う。また、もう1つ誤解されているのが、学校運営協議会の会長と校長と、どっちが偉いのかということである。これは明らかで、校長が学校の経営責任者である。地域の代表が学校に入ってくると、校長の立場がなくなるのではないかと誤解される方もいる。このようなことが、針小棒大になり、CSをわざわざ入れることはない、という雰囲気がある。

来年、国は、この誤解が解けるような法改正をする予定であり、それと同時に、全国のCSの取り組みを進めやすくするため、努力義務という規定も入る予定である。規定から努力義務、そして何年後かには義務化となると思う。ただし、あまり急ぐと形骸化につながるのだから、地域の皆様方の盛り上がり、先生方の理解を同時に考えながら、進められていくべきものだと思う。

ところで、ほとんどの先生方は頑張っているが、直近のOECDの「PISA調査」では、日本の学力は世界でトップクラスであるが、自分の頭で考える、自分で判断する、自分の言葉で表現する、発表する、などという肝心なところの力が、他の国に比べると弱い。自己肯定感も弱い。また、自己肯定感は、アメリカや韓国や中国の子どもに比べ、半分くらいである。

もう1つ懸念材料をいえば、少子高齢化である。人口問題について、ある研究所では、何も策を打たなければ、50年後には人口は8,000万人くらいになり、そして、100年後には、今の半分の大体6,000万人くらいになる、としている。つまり、半分の人口でお互いを支えあって生きていかなければならない、ということである。

こうしたわが国の厳しい状況があるが、希望もある。それは、子どもたちで、人材育成である。様々な課題がある中で、その責任を、先生方だけに押し付けるのではなく、地域に住む人も、教育の当事者であると考えなければならない。自分さえよければいいではなく、いろいろな人を支えながら、共に生きていける、という子どもたちを育てる。また、そういう社会にしていかなければならない。社会総ぐるみで子どもを育てていくということが必要なこと

になってくると思う。学校の当事者であるのは、先生だけではなく、その地域に住む人、そして家庭である。そして、先生方の努力と、地域住民の努力と一緒にやっていく仕組みは、CSということになる。

いい学校をつくっていくというプロセスが、いい地域社会をつくっていくということにもつながる。地域が活性化していく。地域の人たちも一緒になって、頑張っ、生涯学習をしていくことになり、人間的に成長し、自立をしていくということにもつながっていく仕組みである。

学力向上にしても、生涯学習という面から見ても、自尊感情を育てる、問題行動を少なくする、様々な角度から見ても、CSは対応ができる仕組みで、優れた仕組みであるから、早くCSを整備して、実際に活動して、改善しながら、皆で子どもを育て、そして地域の皆さんが楽しく、支えあって、励ましあって生きていけるような社会をつくっていくことが生まれるのではないかと思う。

高等学校は全国的に非常にCSが少ないが、高等学校こそやはりCSが必要だと思う。また、特別支援学校については、地域社会とつながることは共生社会の観点から非常に重要なことである。

地域社会を学校の方からばかりでなく、地域の方や社会教育関係者がCSとタイアップしていくことが大事である。車の両輪として、地域社会の成熟と、学校教育をよくしていくことを、両方でやっていくことによって、未来社会をつくっていくということである。若い人とかお年寄りとか関係なく、自分ができることをとにかくやっていくことが、CSには必要とされる。

ぜひ、ご理解いただき、CSについて、更なる充実・発展を期していきたいと思う。

## イ 教育論議

「かながわの新たな学校づくりと地域づくりを考える」をテーマに、具体的な提案や解決の方策について、パネリストの課題提起や、会場からの意見等により、次の2つの視点で教育論議が行われた。



視点1 かながわらしいコミュニティ・スクールの推進による学校づくり

視点2 学校づくりへの協働・連携と地域づくり

### (視点1 主な意見)

- ・ CSの取組みについて、住民や保護者に効果的に伝える機会をつくるというのが、一つ大きな課題である。
- ・ 住民の方が、楽しみながら、学校づくりについて学ぶことができるような仕掛けが必要である。
- ・ 持続的に、CSの意義を、地域の方や教職員に理解してもらい取組みも必要である。
- ・ 地域、家庭、学校それぞれが主体とし、バランス良く回るように活動していくことが、CS成功に導いていける要因である。
- ・ これまでの慣例的な活動を変えていくのは大変かもしれないが、我慢強く地域は学校へ働きかけ、学校はそれをいやがらずに少しずつでも受け入れていく努力が求められる。
- ・ かながわの教育力を生かした、「生涯にわたる自分づくり」が大事であり、教育コミュニティをつくっていくことが活力ある地域づくりを進めることになる。

- ・ もっと継続的に子どもに関わる仕組みが、学校と地域をつないでいたら、子どもも楽しくなるのではないかと考える。幼少時代から高校生まで同じ大人に見守られていたら、子どもも安心の中で育つのではないか。
- ・ CSという仕組みを通じて、子どもたちが様々な地域の集団に関わり、社会参画をしていくことが、「自立」につながるという視点を、いかにして「かながわらしい」ということに結びつけていくかを、考えることが重要なポイントである。
- ・ 「かながわらしいコミュニティ・スクール」の取組みを通じて、子どもたちが様々な経験や体験をして、多面的に考えやよさ等を捉えられるようになることが大切である。そうすれば、お互いに認め合う社会になっていき、子どもたちが自信をもって世界に出て行ける。
- ・ クラブ交流で、小学生が私たちのことを頼ってくれて、コミュニケーションをとることができ、交流してよかったと思う。
- ・ 異年齢交流などによる、直接的な体験は、自己肯定感につながっていくので、大切である。

## (視点2 主な意見)

- ・ 学校は地域づくりにも深く関係した方がよい。地域が学校に協力するだけではなく、学校が地域をつくっていくことも必要である。
- ・ 地域住民や保護者が学校にかかわりやすくなることで、異年齢の子どもを持つ保護者同士の交流など、CSには家庭教育という側面からの生涯学習の可能性がある。
- ・ CSからスクール・コミュニティへという流れは必然である。文部科学省で提案している「地域学校協働本部（仮称）」に、主体的に地域住民がかかわり、担っていくことも同時に行われ、学校側もCSとタイアップすると、さらに学校づくり、地域づくりが非常に効果的に進んでいく。
- ・ 高等学校の場合は、小・中学校等と異なり、“テーマ・コミュニティ”がやりやすいのではないか。その学校の周辺を基盤の“地域”としながらも、テーマに応じて、全県から様々な方とつながる。地域というのは、ここだけというものはないので、自由に考えてよい。
- ・ 住んでいる市から別の市に通っているが、学校のある地域をあまり知らないことから、違和感を感じている。他校の取組みを見て、うらやましく感じた。CSがさらに浸透していくことを願っている。
- ・ 何が正しいということではなく、何が正しいかを選べる力を身に付けることが大事であり、そのためには様々な考え方や価値観があった方がよい。そのような社会にするために、CSがあるべきである。
- ・ 県立学校と、県立学校がある市町村教育委員会、市役所・町役場との連携も不可欠である。



(今後に向けて)

- ・ 高校にとって、多くの地域の方々の意見にふれられる学校づくりが行われることを期待したい。
- ・ 多様性に富んだ価値観にふれ、それをどのように自分のものにしてきたかが重要である。子どもたちがそれにふれられるよう、CSによる学校づくりに期待したい。
- ・ 何のためにCSをつくっているのか、ということの原点を時々思い出すことを忘れないでほしい。
- ・ 地域の人たちを、どれだけ子どもの成長、教育に巻き込んでいけるか、ということに工夫・改善をしていくことに期待したい。
- ・ CSを推進するためには、学校が地域との連携をより図っていこうという考えを、説明の場を設けるなどして、地域住民に十分理解してもらい、そして、地域住民を巻き込んでいくことが大切である。また、地域住民と子どもたちがふれ合うことが大切であり、そのためには、CSはとても重要で必要性がある。

#### (4) 閉会 (かながわ人づくり推進ネットワーク 幹事長 内藤 昌孝)

閉会のことばとして、本日のコラボ、「かながわ教育月間」、そしてCSの推進は、正に「かながわらしさ」を具現化するもので、「かながわ教育ビジョン」を始め、「かながわの教育」への期待や熱い思いを、一人でも多くの方と共有し、「連携・協力」から一歩進んで「参画・協働」によるかながわの人づくりを進めていくこと等について、話があった。



#### 4 パネル展示等について

12時15分から17時まで、会場前にて、「かながわ教育月間」中に実施した教育イベントなどの人づくりの取り組みについて、パネルやチラシ等で紹介を行った。

